

博物館リニューアル・オープンから5万人目の入館者



随 筆

江 口 太 郎*

50,000 Visitors in the Museum of Osaka University

Key Words : New exhibition, Visitors, History of Osaka University,
Science communication.

1. はじめに

2007年の本誌(『生産と技術』第59巻No. 4)に「大阪大学総合学術博物館のリニューアル・オープン」と題して「夢はバラ色」のコーナーに、待兼山修学館(登録有形文化財:旧医療技術短期大学部本館、昭和6年築、3階建て2,200 m²)の全面改修工事の竣工直前の様子を報告した。あれからほぼ3年経とうとしている。その待兼山修学館では、2010年5月29日(土)にリニューアル・オープンからの累計で5万人目の参観者を迎えた。当日は、夕方から企画展のレセプションも予定され、鷲田総長も参観に訪れており、5万人目のご家族へささやかな記念品を贈呈した【写真1】。ちなみに、これまでの入館者数の推移は、平成20年度が16,098名、平成21年度が20,123名となっている。入館者数に一喜一憂する必要はないと考えているが、対外的な説明には増加しているほうが楽なので、正直なところほっとしている。ここでは、現在の待兼山修学館の様子を簡単に紹介させて頂く。

2. 大学博物館の役割

最初に、ユニバーシティ・ミュージアムとして求められている役割について簡単にふれておこう。1996年に発表された学術審議会の報告によると「ミュージアムとは、大学において収集・生成された有



写真1 5万人目の家族

形の学術標本を整理、保存し、公開・展示し、その情報を提供するとともに、これらの学術標本を対象に組織的に独自の研究・教育を行い、学術研究と高等教育に資することを目的とした施設である。加えて、『社会に開かれた大学』の窓口として展示や講演会等を通じ、人々の多様な学習ニーズにこたえることができる施設でもある」と提言されている。すなわち、学内に散在する166万点を超える貴重な学術標本資料の保存と管理を行い、その学術標本からの学術価値の新たな探索を独自にまた共同で推進することが求められている。さらに、大学ばかりでなく、小・中・高等学校や社会人など広く地域社会に学術標本資料や大学で行われている先端研究の成果をわかりやすく提供することも重要な役割になる。つまり、学術標本資料に関して「収集・保存」、「分析・活用」、「再現・展示」の科学を遂行することが主要な博物館業務になる。

2007年8月に改修工事がおわった待兼山修学館では、上述の3つの目標のうち「再現・展示」を活発にして、常設展示や企画展示を通じた社会貢献に資することとした【写真2】。新展示場の基本コン



* Taro EGUCHI

1947年10月生
大阪大学大学院理学研究科博士課程単位
取得退学(1976年)
現在、大阪大学総合学術博物館 館長・
教授 理学博士 物理化学・博物科学
TEL: 06-6850-6710
FAX: 06-6850-6720
E-mail: eguchi@museum.osaka-u.ac.jp

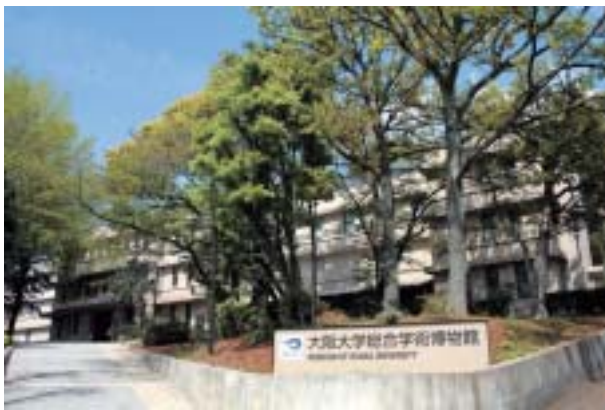


写真2 待兼山修学館近影

セプトは、大阪大学のモットーである「地域に生き世界に伸びる」を具体化する「交流型ミュージアム」である。すなわち、大阪大学の「知の集積」を中心に、さまざまな人・モノが行き交う場を創出し、リアリティーを重視した交流を通じて、大学の基礎研究や応用研究がどのように社会とつながっているかを発信することを展示や映像等の制作の基本方針に据えた。

3. 待兼山修学館での企画展

前回の拙稿では、常設展示の内容について報告したので、本稿では3階の多目的ルームで年2、3回の割合で開催してきた企画展・特別展の取り組みを紹介する。なお、当館では、館員あるいは博物館兼任教員の研究に関わる展覧会を「特別展」、それ以外の展覧会を「企画展」と称している。どちらも規模としては同程度で、このような展覧会の場合にも、たんに社会貢献のみを目的にするのではなく、あくまでも阪大における教育・研究に資する、という大学博物館としての基本原則を貫くことを心がけている。

平成21年度は春季、秋季、冬季と年3回開催した。まず、2009年4月27日から7月11日まで、第4回特別展「昭和12年のモダン都市へ 観光映画『大大阪観光』の世界」を大阪歴史博物館、大学院文学研究科と協力して行った【写真3】。これは、当館の橋爪節也教授の大阪学に関するコレクションと研究の成果を展示したもので、同時に大阪市が製作した観光映画を上映し、期間中にミュージアムレクチャーも5回開催した。昭和12年前後の大大阪時代を懐かしむオールド・ファンが大勢詰めかけ、入



写真3 第4回特別展「昭和12年のモダン都市へ 観光映画『大大阪観光』の世界」

場者は6,825名に達した。これを機に資料整理も進め、展覧会と同名の博物館叢書 No. 4 も刊行し、好評を博している。

ついで、2009年10月1日から12月12日まで、第9回企画展「維新派という現象『ろじ式』」を前衛劇団の維新派、大学院文学研究科、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、大阪大学21世紀懐徳堂と協力して開催した。これは、通常の博物館展示と異なり、世界的に有名な維新派の舞台を思わせる実験的な展示空間を創りだし、参観者が劇場空間内で展示を体験できるようにした【写真4】。期間中にミ



写真4 「維新派という現象『ろじ式』」の展示風景

ミュージアムレクチャーを3回、シンポジウムを1回、そして、修学館前の広場で維新派のパフォーマンスも1回おこなった。入場者は4,771名に上った。この企画展でも、文学研究科の大学院生に説明用のリーフレット作成などに参画してもらい、展覧会を教育にも役立てることができた。

最後に、通常は訪れる人がもっとも少ない冬季(2010年1月16日から3月30日)に第10回企画展「漆」の再発見 日本近代化学の芽生え」を大学院理学研究科との共催で、漆を科学する会、北村昭齋(人間国宝)、日本化学会近畿支部、近畿化学協会、大阪大学21世紀懐徳堂などの協力を得て開催した。期間中にミュージアムレクチャーを4回、鷲田総長と北村昭齋氏との特別対談も行った。入場者は、「いちよう祭」や「まちかね祭」などの大きな大学行事がないにも関わらず3,728名に上った。

このように記すと、順調に推移しているように思えるが、じつは年3回の開催はきわめて大変なことがわかった。つぎに、第10回企画展を例にとって詳述する。

4. 展覧会ができるまで

まず、一般の方にはなじみが薄いと思うので、展覧会開催にどのような業務が必要になるかを以下に列記する：企画立案・展示品選定・展示品借用交渉・広報用写真撮影・ポスター等の作成および発送・展示会場の設計・展示パネル等の作成・会場設営・列品作業・ミュージアムレクチャー実施・報道関係対応・展示会場撤収・展示品返却などがある。

第10回企画展の準備が始まったのは、2008年の秋からである。化学専攻と博物館にワーキング(WG)をつくり、座長には構造有機化学研究室の久保教授が就任した。大学執行部の理解も得て予算も確保でき、基本方針として、化学教室の歴史の総花的展示ではなく文理融合した「ウルシオールの研究」を核に据えることとした。すなわち、ウルシオールの分子構造を解明した化学者・眞島利行(大阪大学理学部化学科の創設者の一人)らの業績をたどると同時に、黒や朱色の光沢の美しさと螺鈿(らでん)、蒔絵(まきえ)、堆朱(ついしゅ)などの加飾技法で装飾された美しい工芸品も展示して、実用性から美の世界までを可能とする「ウルシオール」それはいかなる物質か? この疑問を探る知的好奇

心の旅へと参観者を導くことを展覧会の趣旨とした。

つぎに取りかからねばならないことは、それまでほとんど放置されてきた眞島利行およびその研究室の遺物の整理・博物館データベースへの入力作業である。これらの面倒な作業を手伝ってくれたのは、大学院のサイエンスコア・カリキュラム受講生12名だった。整理が終了し、展示品候補などが出そろったのは2009年5月になる。そこで、展覧会の骨子(1. 導入部、2. 中心部・化学的解説、3. 伝統工芸との関連)、および螺鈿細工の人間国宝である北村昭齋氏に協力を依頼することなどが決定された。夏期休暇中のある日の午後には、8時間にわたってWGコアメンバーと大学院生などがつくった展示プランやパネルの原案のパワーポイントを用いた発表会を開催し、プランを具体化していった。減圧蒸留装置、常圧接触還元装置の復元やミュージアムレクチャーの講師の人選なども決定した。

その後は展示業者も交えて、ポスター・チラシデザインの決定、展示の平面配置プランの策定、パネルとキャプションの数回に及ぶ校正作業、現在の化学教室紹介映像の製作、直前の展示品の列品作業などをへて、本年1月16日の開催に至った訳である。

最初の出発からするとほぼ一年半も費やしたことになる。資料整理などの準備作業を除いても最低でも半年間は必要になるのである。つまり、1年間に3回の展覧会を行うということは、これらの作業を同時並行でこなしてゆかねばならないことになる。マンパワー不足を痛感させられた次第である。

この展覧会の収穫は、先程述べた大学院生の教育や文理融合した展示プランの実現ばかりではない。眞島利行の実験ノート【写真5】、当時のオゾン発



写真5 眞島利行の実験ノート

生装置や精製したウルシオール試料を発掘することにより、貴重な化学史資料として再活用することになった点である。これらの資料は、東京上野の国立科学博物館において平成23年に行われる予定の「日本の化学者展(仮称)」でも出品展示される予定である。

5. おわりに

本稿を執筆している6月下旬は、4月27日から始まった第11回企画展「えがかれた適塾」が終わろうとしている【写真6】。本年が緒方洪庵の生誕200年であること、また阪大創立80周年のプレイベントとして、適塾あるいは緒方洪庵が、文学作品、漫画、映画などでどのように描かれているのかを、本学所蔵の適塾資料と比較しながら展示したユニークな展覧会となっている。NHKテレビ「ぐるっと関西お昼まえ」や朝日新聞などにも取り上げられ、会期末までに参観者は4,500名を突破する勢いである。冒頭で紹介した5万人目の来館者は、まさにこの展覧会を訪れたご家族だったのである。

最後になりましたが、総合学術博物館 待兼山修学館展示場は、月～土曜日、午前10:30から午後5:00まで入場無料で公開していますので、読者の皆さんも是非ともお越しください。

【日・祝・年末年始は休館。問合せ：06-6850-6284】
また、併設するミュージアムカフェ「坂」では、同窓会なども開催できますのでご利用ください。

【問合せ：06-6841-9379】



写真6 第11回企画展「えがかれた適塾」

